

復刻にあたって

本巻は、いわゆる重症心身障害児に視点をあてて、国家独占資本主義のもとでの障害と障害者問題の歴史、実態、課題を解明している。

重症心身障害児に視点をあてるといことは、国家独占資本主義の本質と、その政治、経済、文化等々におけるあらわれを、もつとも鋭くかつ批判的に分析することにつながっている。それとともに、障害分野にそくして考えると、障害のある人々が、一般の医療・保健・福祉・教育・労働・生活、文化のシステムと実践から排除されてきた事実、さらに障害のある人々の内部に目を向けてみると、障害の重い人々ほど権利侵害が加重されるといふ事実を鮮やかに描き出し、そのような制度・施策に対する根底的批判を可能にする。それはもちろん、人間の尊厳の尊重と権利の保障に関して、重症心身障害児（者）が、あたかもそれが当然であるかのようにして、除外されてきたという紛れもない事実があるか

らである。

田中さんは本書で、このようなことについてただ抽象的に論じるのではなく、関連法令、政策担当者の発言、重症心身障害児の療育・教育等の創成のために奮闘した人々の言葉など、収集された多数の資料を提示しながら——その意味では、著者として自覚的であったかどうかはついぞ確かめてみることはないままになってしまったのであるが、社会的な手法も援用して——記述している。あえて率直に言うと、記述に先立つ整理と分析がやや不十分であるために、読者も自らの頭を働かせながらその論理構成の作業に同道するつもりで本書を読む必要がある。だが、次々と紹介される事実そのものに重みがあり、かつ重症児療育の現場に身を置いて、あるいはつねに現場とつながりながら、この問題を考ええてきた著者のほとばしり出る情熱が、その不十分さを補ってあまりある。

本書は、しかし、批判に終始している本ではないことも指摘しておきたい。国家独占資本主義下での政策立案者・遂行者と、障害者・家族・関係者・国民を、明確に区別することを読者に求めつつ、政策批判等を行っているので、批判の中に創造と発展へのいくつもの契機、その作業の担い手が誰であるのかがすでに示されている。

同時に、本書のサブタイトル「夜明け前の子どもたちとともに」に二重の意味を付与

しながら、発達保障に向けての理論的・実践的な成果を具体的に示すこともなされている。「二重の意味」と私が言うのは、一つは、本書全体が、夜明けが近いことを感じさせる地点までようやくたどり着いたと言える社会状況の中に生き、発達の獲得に向かって活動している重症心身障害児に心を寄せて書かれているからであり、もう一つは、「夜明け前の子どもたち」と題された療育映画の制作にまつわるエピソード、のちに「階層—段階理論」として整理されてくる田中理論の基本骨格と中身が、発達初期にある人々に視点をあてて書かれているからである。

本書が広く読まれ、今日的課題の解明と実践・運動に生かされることを期待したい。

二〇〇六年九月

全国障害者問題研究会前全国委員長（第23期～36期）・顧問

茂木 俊彦